

説 林

宋代軍隊の入墨について

曾 我 部 靜 雄

唐の玄宗の朝に兵農の分離が行はれてから、傭兵の制度が起り、五代の紛亂には各英雄が各々私兵を擁して覇を争ひ、遂に趙匡胤の勝ちとなつて宋國家が建設された。かく宋が出来たが、矢張りその兵制は原則として召募の制度即ち職業兵士制であつた。その兵種は普通禁軍、廂軍、郷兵、蕃兵の四に區別される。禁軍は天子の衛兵で、京師を守り征伐に備ふものである。廂軍と云ふのは諸州郡の鎮兵で、これは専ら州郡の百役に供せらるるものである。これ

宋代軍隊の入墨について

は初めは刑徒の所罰方法として壯城とか牢城を置き、これに罪人を收容して官の諸役使に備へたものが起りである。宋の張方平の樂全集卷二論國計事の條に、

太祖皇帝制_二折杖法_一、免_二天下徒_一、初置_二壯城牢城_一、備_二諸役使_一、謂_二之廂軍_一、後乃展轉增_二創軍額_一、今遂與_二禁軍數目_一幾等、

即ち初めは廂軍なるものは刑徒より編成されたものであるが、時代が經るに従つて種々なる名目にて人を募り、官廳の諸役に任じ、神宗の熙寧頃にはその名が二百二十三もあつた。あたかも宦官は初めは宮刑に處せられたものを以つて當ててゐたものが、後には専ら普通人を去勢して宦官となせしが如し。宋の

楊仲良の通鑑長編紀事本末^{卷六}議減兵雜類の條に、

熙寧三年十二月、樞密院言、諸路廂軍名額猥多、

自^二騎射^一至^二牢城^一、其名凡二百二十三、

と見ゆ。この廂軍は専ら雜役に給することは先に述べた如くであるが、一部のものは教閲して廂禁軍と號するものとなし、後には下禁軍と稱するものとなしたとは通鑑長編紀事本末^{卷六}に見えてゐる。この廂軍があるために國の力役たる工作營繕は一般の民は與る所なく、天下の民力はこれによつて完固した^(韋俊卿の群書考)。唐の德宗の時、兩税法が創められ、租、庸、調の制度が廢され、民の庸即ち力役税が免ぜられた筈にも不拘、五代の時などは凡そ國の役は皆民に調し、兩税法によつて人民の力役の代償をば納めてゐる上に力役を課せられて、民は二重の負擔に苦んだのが、宋になつて廂軍の出現によつて救はれた次第である。郷兵は宋史兵志の説明によると、戶籍に選び、或は募りに應じ、これを團結し訓練

して以つて各地の防守に任ずるものを云ふとあり、即ちこは一種の民兵であり、義勇兵である。これに屬するものには曰く義勇、曰く弓箭社、曰く保毅、曰く寨戶、曰く強人、曰く土丁、曰く弩手、曰く洞丁、曰く槍手、曰く弓箭手、曰く敢勇などの名稱あるが、こはその各々の地方の民によつて名づけたのである^(宋史百九十九鄉兵の條、玉海卷百三十九、群書考索後集卷四十一兵制門)。蕃兵は土民兵にして國境附近に接して住居せる羌族などの降り來れるものを團結して藩籬の兵となしたものであり、これ亦一種の郷兵であるが、人種が異なるにより特に蕃兵と云ふ。

以上の説明にて宋代の四種類の軍隊が明かとなつたが、宋代にはこの四種の兵士に顔及び手に刺黥即ち入墨する制度あり。これここに説かんと欲するものである。

支那にては古くより墨、劓、剕、宮、大辟の所謂五刑が行はれ、この五刑の内の墨刑は刑者の顔に黥即ち

入墨するのである。而る所五刑の内の墨、劓、剕の三

肉刑は前漢の文帝即位十三年に廢止された。それは

史記^{卷十}文帝本紀を見るに、齊の太倉令淳于意罪あり、

刑せらるるに當り、その少女緹縈が、「夫死者不可_レ復生、刑者不可_レ復屬、雖_レ復欲改_レ過自新、其道無_レ由也、妾願沒入爲_レ官婢、贖_レ父刑罪、使_レ得_レ自新、」と

云ふ如き悲痛なる上書をなしたによつて、文帝もその意を憐悲してここに墨、劓、剕の三肉刑を除くに至つた。これに代つて出來たものが笞杖の刑である。

かく墨刑などの肉刑は一旦廢せられて、永く國家の定めたる_レ刑罰中には無くなつたが、宋代にはこの墨刑が復せられ且又兵卒に入墨する制度が出來た。兵卒に黥するは唐以前には無きものの如し。この起原は宋の前の唐末五代の紛亂の時にあり。而も二ヶ所に同時頃に起つた。即ち一つは梁の太祖朱全忠の創めたもの、他は燕主劉仁恭及びその子劉守光の創めたものである。司馬光の資治通鑑^{卷二百六十六}後梁紀太祖

神武元聖孝皇帝上の條に、

初帝（梁太祖朱全忠）在藩鎮、用法嚴、將校有

戰沒者、所部兵悉斬之、謂之跋隊斬、士卒失

主將者、多亡逸不敢歸、帝乃命凡軍士皆文其

面、以記軍號、軍士或思鄉里逃去、關津輒執

之、送所屬、無不死者、其鄉里亦不敢容、由

是亡者、皆聚山澤爲盜、大爲州縣之患、壬寅

（開平元年十一月壬寅）、詔敕其罪、自今雖文

面、亦聽還鄉里、盜減什七八、

とあり。梁の太祖朱全忠が帝位に即かぬ前の藩鎮時代に、法を用ゐること太だ嚴格で、戦ひの際に將校に戰死する者あれば、その部下は己れ等の將を護らずして死に至らしめたとし、その責任者として、悉く部下を斬に處した。これを跋隊斬と謂ふ。この如く主將を失ふと死に處せらるることとて、主將を失ひたる士卒共は多く逃亡し歸り來る者なし。よつて太祖は悉く軍卒共の顔に軍號を刻印し、一見して軍卒

なるを明かにした。ために逃亡しても直ちに發見され、郷里にも容れられず、身を置く所無きに至り、ここに彼等は窮せし餘りに山澤に聚つて盜賊となり、各地を荒し廻り、州縣の患となつた。よつて太祖も法令を寛にし、顔に入墨ある軍卒も郷里に還ることを許したから、盜賊も大いに減ずるやうになつたと云ふ。これにて知らるる如く梁の太祖のなせる軍士に入墨せるは、軍士の逃亡を防止せんとする必要から考へ出したものである。他の劉仁恭の創めたものは、矢張り資治通鑑^{卷二百六十五}唐紀、昭宣光烈皇帝の條に、

(天祐三年九月)劉仁恭救_レ滄州、戰屢敗、乃下令_レ境內男子十五以上、七十以下、悉自備_二兵糧_一、詣_二行營_一、軍發之後、有_二一人在_二閭里_一、刑無_レ赦、或諫曰、今老弱悉行、婦人不_レ能轉餉、此令必行、濫_レ刑者衆矣、乃命勝_レ執_レ兵者盡行、文_二其面_一曰、定_二霸都_一、士人則文_二其腕或臂_一曰、一心事_二主_一、於

是境內士民、穉孺之外、無_二不_レ文者_一、得_二兵十萬_一、

と。この記事は薛居正等の撰せる舊五代史^{卷百三十五}劉守光傳にも殆んど同一のものが載せられてゐる。唐末五代の初め頃、幽州、滄州地方を領有してゐたる燕主劉仁恭は、汴の諸將のために累年苦められ、その上天祐三年七月梁祖朱全忠が自から將として滄州を攻めたるによつて、仁恭は令を下し、境内の男子は年十五以上七十以下の者を悉く徵發して軍に従はしめ、一人も殘す所なく、貴賤の區別なく、その面に黥しては定_二霸都_一と云ひ、その腕或は臂に黥しては一心事_二主_一と云ふ。これによつて境内の士民は幼孺の外は皆黥し、兵十萬を得たと。舊五代史には二十萬を得たとあり。尙ほ舊五代史によるに是れに由つて燕薊の人民は例として多く黥涅するやうになつたと云ふ。劉仁恭の場合も強制徵發による逃走を防ぐために入墨せしものと思はれる。又資治通鑑^{卷二百六十八}後梁

紀の所に、

燕主劉守光籍_ニ境内丁壯、悉文_レ面爲_レ兵、雖_ニ士人_一不免、

なる記事あり、劉仁恭の子劉守光が境内丁壯は悉く面に入墨して兵となしたとあるが、こは父劉仁恭が天祐三年に行ひたる黥面文臂の法をそのまゝ踏襲し、兵士は悉く黥面する制に彼はなしたのであらう。

以上の如く兵卒に入墨することは、唐末五代争亂の節、兵卒の逃走を防ぐ意味に於いて行はれたものであり、而もその起原は梁祖朱全忠と燕主劉仁恭及びその子劉守光にある如く思はる。従つて宋の蘇洵の嘉祐集_{卷五}兵制の所には、

燕帥劉守光、又從而爲_ニ之黥面涅手之制、天下遂以爲_ニ常法、使_ニ之判然不_レ得_ニ與_ニ齊民齒_一、

とあつて黥面涅手の制は劉守光より起ると言ひ、宋史_{卷百九十三}兵志召募の制の所には、

宋代軍隊の入墨について

唐末士卒疲_ニ於征役、多_ニ亡命者、梁祖令_ニ諸軍悉黥_レ面爲_レ字以識_ニ軍號、是爲_ニ長征之兵_一、

とあつて、この制度は梁祖朱全忠に起るとなしてゐる。しかしよく兩起原を考ふるに、梁祖朱全忠の兵卒に黥せるは、藩鎮に在りし時即ち唐室を滅して篡立して天子となる以前、節度使或は王を稱してゐた時代にあり、帝を稱したるは唐の天祐四年四月（梁の開平元年四月）であるから、これ以前に兵卒に黥する制度を實施してゐたのである。又一方の燕主劉仁恭のなせるは明かに天祐三年九月に實施したとおり。而も兩者は唐の光化二年以來干戈を相交へ天祐三年七月には朱全忠自から兵を將ゐて燕の滄州を攻めたによつて、劉仁恭はこれに對抗せんために、同年九月部内の男子は貴賤となくその面臂に黥する非常手段に出た。兩軍の數年間に互る交戦期間には充分に相互間に各々の軍士の姿を見ることが出来、他の長とする所は直ちに自己の軍隊に應用したるは想像

に難くない。鯨面涅手の兵も多分かゝる事情によつて一方が他を眞似たものであらう。劉仁恭の行つたのは天祐三年九月なるは明かであるが、朱全忠のなせるは天祐四年四月以前なることのみは明で、その日時に至つては正確なる記録は今の所知り得ない。

之れを要するに朱全忠か劉仁恭の何れかがこれを創始し、他がこれを眞似、その日月は唐の最後なる天祐三年（西紀九〇五年）の頃と思はる。

唐末五代の初めに創始されたる鯨面涅手の兵制は、その次の宋に繼承された。宋の李燾の續資治通鑑長編^{卷百三十八}にある韓琦の奏に、

五代多^レ故、法制不^レ立、乃募鯨面、以名^二正軍^一、年祀浸久、耳目習熟、百姓更不^レ知^二前代籍^一民爲^二兵、但爲^二刺面給糧^一、則甘死^二戰鬪^一、

とあるは、この風習の五代より宋に傳はれる事實を述べてゐるのである。宋には禁軍、廂軍、鄉兵、蕃兵の別あることは前に述べたが、この四種の軍隊共に

入墨した。禁軍についてから述べるに當り、禁軍召募の方法より調べん。これについて宋史^{卷百八十七}兵志禁軍、^{卷百九十三}兵志召募之制、^{卷百九十四}兵志揀選之制及び宋の李燾の續資治通鑑長編^{卷四百六十七}などを見るに、初め太祖は軍中の強勇なる者を揀んでこれを兵様と號し、これを諸道に送つてこの者の如き者を招募せしめた。後には更めて木梃を作り、これには尺度がつけられてあり、等長杖と謂ひ、高下の等をつくり、これを以つて度つて採用した。眞宗の大中祥符年間には等長杖を五尺八寸より五尺五寸に至るまでのものに改正するなど以後尺度は時々變更された。これによりて採用されたる者の中、伉健なるは禁軍に短弱なるは廂軍に、配屬さるるが通例である。しかも採用さるると入墨され兵卒となるに必要な金錢衣服を給せられる。勿論鯨面涅手はその所屬の隊號を入れられるのである。宋の曾公亮等の撰せる武經總要前集^{卷一}軍制の所に、

至_二本朝(宋)_一、沿_二唐末五代之制_一、並號_二禁軍_一、鯨_二面營處、衣_二食公上_一、

と見ゆるのや、蘇轍の龍川別志^{卷一}には富弼が青州に知事たりし時、河朔地方が大水にて民は東の方青州に流入した。富弼はよく適當なる處置をなして流民を救ひ、其の間強壯にして禁卒に堪ふる者を募り數千人を得、これに指揮の二字を入墨し、これを諸軍に配置する方法をとつたことや、長編^{卷百三十八}には

韓琦の請によつて、陝西の弓手中より簡拔して悉く面に鯨し禁軍になしたことが見えてゐる。その他^{宋史卷百八十七}兵志禁兵の條や、長編の所々、群書考索後集

兵制の所などに、刺すとか招刺などあるは皆入墨せしを言つたのである。これが北宋の末徽宗、欽宗二帝が金軍に捕はれ、宋の社稷もこの時を以つて盡きるに非ずやと思はれた頃に、國難は救はんとして振ひ立つた勤王軍には、仲々勇壯な面白き鯨面の文あり。勿論この頃は國家動亂の折とて禁軍、廂軍、郷

兵、蕃兵などの區別なく、一般民衆の心あるものも立つて一大將のもとに集合し、宋のために金軍と戦つた。従つてこれ等はその各々の大將の部曲の如き觀を呈し、その駐屯する場所も定つた所なし。劉光世軍、韓世忠軍、岳飛軍、張俊軍などがその中でも大なるものであつた。宋の徐夢莘の著せる三朝北盟會編^{卷百十三}には、

建炎元年、九月二十九日、乙酉、王彥及_二金人_一、戰_二於新鄉縣_一、不利兵潰、彥入_二太行山_一聚_二衆_一、皆面刺_二赤心報國_一、誓殺_二金賊_一八字、號_二八字軍_一、兩河響應、

とあつて、王彥の率ゆる勤王軍は赤心報告誓殺金賊の八字をば面に入墨し、八字軍と號したと言ふ。尙ほ八字軍のことは三朝北盟會編^{卷百九十八}にも見え、そこに引用せる續甯の王彥行狀記には、八字の文字は上記の如く赤心報告誓殺金賊となつてゐるが、同じく引用せる林泉野記には誓殺_二金賊_一、不_二負_一趙王と

なつて少しく文字を異にす。宋の李心傳の撰せる建炎以來朝野雜記甲集^{卷十}八、八字軍の條にも林泉野記と同様に誓殺金賊不負趙王となつて居る。共に八字なるにより八字軍たるの實には相違ないが、文面は異つて何れが眞か判定し得ない。而も李心傳は別の著書なる建炎以來繫年要錄^{卷九}に於いては、

部曲感其義、乃皆刺其面、曰赤心報國、以示其誠、王彥益自感勵、與士卒同甘苦、未幾兩河響應、

とあつて、ここでは赤心報國と謂つてゐる。よつて益々赤心報國が正しいか、不負趙王が正しいかが判定しがたくなつて来る。しかし建炎以來繫年要錄^{卷十}に、

初葛進之掠濱棣二州也、其衆皆面刺字、曰不負趙王、以示忠赤、進自稱統制、とあつて、葛進の率ゆる軍が不負趙王の文字を面に刺したのであるが、此れと彼とが混合して、八字軍の

本當の八字は赤心報國誓殺金賊なるを、誓殺金賊不負趙王と誤つたのではなからうか。尙ほ葛進の軍の不負趙王なる四字は三朝北盟會編^{卷百二十}によるに、永不負趙王、誓不捨金賊、の十字なりしとあり。次に建炎以來繫年要錄^{卷三}建炎四年二月の條には、

茶陵縣軍賊二千餘人、犯郴州永興縣、所虜鄉民、皆面刺聚集興宋四字、欲自連韶路逕趨虔州、

とあつて、茶陵縣軍賊が永興縣を犯し民を虜へて顔に聚集興宋の四字を刺して配下に入れたことを述べ、又同書^{卷十五}三朝北盟會編には、

初壽春卒丁進、被罪而竄、遇亂復還鄉里、聚衆於蘇村、後至數萬、皆面刺六點或入火二字、進自號丁一箭、遂圍壽春府、(繫年要錄)

とあつて、丁進の集めし衆徒は面に六點或は入火の二字を刺黥せるを謂つてゐる。三朝北盟會編^{卷百十五}に見ゆる宗澤の奏言に、「節義丈夫、不敢顧愛其身、而

自黥^レ面^レ爭^レ先救^レ駕者、又不^レ知^ニ幾萬數人^一とある如く、兵卒は勿論、普通の人々も劔をとつて、勤王のために振ひたつ以上は、何れも當時の軍隊の習なる黥面をなした。従つてその黥面の文字は、宋を偲び金を怨む意味を含むは當然で、敵愾心の發露を顔に堂々と表はしたのである。一時の興奮によつて過激なる文字を顔に黥したるものの、冷靜に立ち歸り、金との間も和かなる状態に復歸してくると、かゝる過激なる文字をいつまでも顔に現し居るは折角沈靜しかけたる人心を刺戟し、金國の人々に對しても不快の念を懷かしめるものである。殊にこの頃兩國國交調整の局に當つてゐたかの秦檜は、徹頭徹尾金に對しては屈從主義を採つてゐたものであるから、かゝる兩國國交の障害となる如き事物の存在は、極度に嫌つたものであらう。しかし一旦入墨せしものは死するまで除くことは不可能である。ここに於いてか建炎以來繫年要錄^{卷百}十二紹興七年七月の條に、

宋代軍隊の入墨について

都督府請、諸軍有^下面刺^ニ大字^一及燒炙^ニ之人、不^レ許^レ入^ニ皇城門^一、從^レ之、時西北忠義人、多有^下刺^ニ面爲^ニ殺^ニ敵報^ニ國等字^一、故申明焉、

とあつて、面に大字を刺したもののや、燒炙のあるものの、皇城の門即ち當時南宋の都なる臨安の城門より城中に入るを禁止した。これは西北忠義の人士は多く殺敵報國などの文字を顔に刺してゐる理由によるとあるが、這般の事情を雄辯に物語れるもので、往きには國家の忠臣として重んぜられた者が、今は國家の嫌惡する所となる。城門に入るを許されぬ以上は天子の謁見も許されず、面に黥あるの將は他の無き者と更代して入朝せしめた。しかし紹興十四年二月、統制官の李用の入朝を許せし所、彼面に雙旗の黥あり、閣門ために彼の入門を遮ぎり、上の指令を仰ぐ。よつて、ここに黥面燒炙あるの人も入見を許すことになつた。

以上禁軍は黥面するを述べた。これ等は陸兵につ

いてであるが、宋には陸兵のみならず水軍もあり。

特に南宋となつては楊子江、淮水が金や元との境となつてゐるので、自然水軍の發達を招き、種々なる戰艦を建造し、江淮の要所には要塞を築きたることは、宋史^{卷百八}兵志禁軍の條に詳し。これ等水軍も亦黥面涅手された。建炎以來繫年要錄^{卷九}紹興五年八月の條には、

都督行府言、以見管湖南水軍、及周倫等所部置十指揮、並於手背上刺横江水軍四字、從之、

とあつて、湖南水軍及び周倫等の率ゆる水兵の手背上に横江水軍の四字を入墨せし事實を述べてゐる。

次は廂軍の黥面涅手について述べん。廂軍は先きに引用せし張方平の樂全集^{卷二}にある「太祖皇帝制折杖法、免天下徒、初置壯城牢城、備諸役使、謂之廂軍、」との如く、元來は罪人を使役に用ひたものを云つたのであるが、後には人數も多くなり、一般より

募集するやうになつた。支那に於ける刑法の制度は、先きに述べし如く、漢の文帝の時に肉刑を除き箠刑を採用してから、歷代これにより、多少の増減はあるが、大體笞杖徒流死の五等で、隋の高頡が經世の才を以つて科律を定め、笞は十より五十に至り、杖は六十より百に至り、徒は一年より三年に至り、流は千里より二千里に至り、大辟即ち死刑は絞、斬の方法をとることとし、前代の鞭刑、梟首、轢裂の法を蠲損した。この高頡の新制度は支那刑法史上、文帝の肉刑を除いたことと共に一大エポックを作つたもので、唐もこの制度を遵用し、たゞ流刑は二千里より三千里に至ることになつた。而して笞杖の刑は皆竹を用ひ、その徒流に坐せし者は杖を加へず、若し杖を加ふる時は即ち役を免す。諸々の徒罪を犯し居作にあたるものは、在京の者は男子は將作監に送り勞役に服し、婦人は少府監に送り裁縫に従事せしむ。京師外の地にある者は、男子はその地の官役に供し、婦人は春蠶

の勞役に服す。流罪を犯して配流にあたる者は二千里、二千五百里、三千里の三等、而も流罪の重きものは加役流として流三千里、役三年である。宋になつてから太祖即位するや、乾徳元年三月吏部尙書張昭等詔をうけて刑法の改正を行ひ、宋としての新しい刑法が出来た。それは折杖の制として竹笞に代へて木杖を以つて刑を施行し、その代り數を減折して笞一百なれば臀杖二十に折減した。杖は木にて作り箠より大きく、長さ三尺五寸、大頭の闊さ二寸に過ぎず、厚さ及び小頭の徑は九分に過ぎず、小杖の方は長さは四尺五寸、大頭の徑は六分、小頭の徑は五分と定めた。而して徒罪を犯す者はこの杖を加へて役を免じ、即ち徒三年は脊杖二十、二年半は脊杖十八、二年は脊杖十七、一年半は脊杖十五、一年は脊杖十三と改め、流罪を犯す者は杖を加へて役に配することとした。即ち加役流として流罪の一番重きものは脊杖二十配役三年、流三千里は杖二十配役一年、二千五百里は

脊杖十八配役一年、二千里は脊杖十七配役一年と改め、情の最も重きものには加杖刺配の刑を課した。これは杖を加へられ面に入墨されその上に遠近の配所に行きて勞役に服するので、徒流杖の三者を兼ね課せられた上に黥せられるのである。世が降るに従つて犯罪者も多くなり、在來の刑罰にては禁止出來ず、従つて刑は自然と重くなつてくる一方である。長編卷三百二十八に神宗の元豐五年七月壬午に發せられた詔が載せられてあるが、その中に、

三代之時、民有疆井、分別圻域、彰善癉惡、人重遷徙、故以流爲重、後世之民、遷徙不常、而流不足治也、故用加役流、又未足懲也、故有刺配、猶未足以待、故又有遠近之別。

とは流罪の變遷を要領よく述べた言である。罪人に黥することも五代に始りたるが如し。宋の高承の撰せる事物起原卷十に

配、舊云刺面、而配起於周太祖世宗之代、按王

薄五代會要二曰、晋天福三年八月、左街從人韓延嗣、徒二年半、刺_レ面配_二華州發運務_一、蓋唐雖有_レ配_二流諸州_一之文、此始有_二配法_一、而刺_レ面當_レ起_二於是_一也、

とか、丘濬の大學衍義補_{卷百}に、

流配、舊制止_二於遠徙_一、晋天福中、始創_二刺_レ面之法_一、遂爲_二戢_レ姦重典_一、宋因_二其法_一、

などあつて、五代に起原せるを述べてゐる。我が國の徳川時代の學者なる伊藤長胤の著せる制度通_{卷十}にも、

徒といふは疏議に徒者奴也、蓋奴_二辱_レ之_一といへり。(中略) 男女の罪あるものを、その科代に一處にとめあさて、普請細工等をさせ、罪の輕重によりて年數あることなり。漢の時に城旦舂、鬼薪、白粲、隸臣妾、後漢の輸_二作左校_一等、曹魏の作刑、隋唐の居作、配、五代宋の配役、刺配など名はかはれども何れも徒罪のことなり。徒(註、配の

こと)といふこと五代晋の天福の比よりはじまりて、入れ墨をして配するによりて、是を刺配といふ。宋より以來もこれありて、明に刺字と云ふ。

とあつて、五代より刺配なる刑が始まれるを言つてゐる。宋これを承けて刺配の法を行つたのであるが、五代時代に比してその條文非常に多い。前代に於て流罪の一番重きものとされてゐたる加役流でも役が滿つると放たれ、或は赦に會ふと免ぜられる。然るに宋代の刺配は徒流杖の刑を課せられる上に、更に黥せられ遠惡なる地に配置され、勞役に服して一生を終る。流配される所の遠惡なる州軍には、何等の制限なき故、これ亦その時々_二の官吏の意向にて_一、勝手に如何なる僻遠の地にでも配することが出来る。宋代世が降るに従つて刺配の條文が多くなつて来る。眞宗の大中祥符編勅には刺配の罪四十六條、仁宗の天聖編勅には五十四條、同じく慶歷編勅には九

十九條、神宗¹⁰の熙寧頃には二百餘條に増加してゐる。この様に刺配の條文が増加せしこととて黥徒の遠惡の地に配置さるる者頗る多くなり、張方平の請^レ減^二刺配刑名^一の上奏をした仁宗の慶曆年間には、かかる黥徒の配された州郡の中には、あまりに多數送りこまれることとて、その處置に困り、往々上奏して配當さるるを一時止めんことを願つてゐる有様であつた。尙ほ元の施耐庵の作と云はるる水滸傳を讀むと、その中に現はるる豪傑の一人、禁軍の教頭林冲が、當時即ち徽宗時代の權力者高俅の意にさからひ、冤罪によつて、脊杖さること二十、顔に入墨せられ滄州の牢城に流配されることがあるが、宋代刺配の實狀を彷彿せしむるものがある。水滸傳第七回の林教頭刺配滄州道^二の所に、

此日府尹（開封府尹）回來陞廳、叫^二林冲、除^二了長枷、斷^二了二十脊杖、喚^二箇文筆匠、刺^二了面頰、量^二地方遠近、該^レ配^二滄州牢城^一（中略）原來宋時、

宋代軍隊の入墨について

但是犯人徒流遷徙的、都臉上刺^レ字、怕^二人恨怪^一、只喚^二做打^二金印^一、とあり。

この様にして罪人の顔に入墨されたものが各地方官廳に配當され、使役に服したものが廂軍である。従つて廂軍に入墨あるは當然である。

配流される地方は宋史^{卷二}刑法志配役の條によると、國初は西北邊に配隸してゐたが、これ等は多く逃亡し塞外に出でゆき、羌人を誘ひて寇をなすに至つたから、遂ひに太宗の時より西北邊に配するをやめ、これより南方の諸州縣や登州の沙門島及び通州の海島などに配流した。沙門島や通州の海島にては彼等を用ひて海水より鹽を製造してゐたのである。大學衍義補^{卷百五}によると太宗太平興國四年からのこと、云ふ。犯罪人の配隸されない地方にては、犯罪人に代るべき人を招募して使役に供したので、廂軍⁸の中でも諸司の募る者は役兵と言ひ、諸州の募るものは

本城廂兵と言つた。彼等にも亦矢張り入墨するのが普通である。

次は郷兵の入墨について論ぜん。これについては宋史兵志^{卷百九十一}、郷兵の條を見るも、入墨せし事實を多數發見す。ここに二三の例を舉げんに、河東陝西弓箭手の所では、

自備弓馬、涅手背爲弓箭手、

とか、河北河東陝西義勇の所では、

河北河東陝西義勇、慶曆二年、選河北河東強壯、

竝抄民丁、涅手背爲之、……熙寧初、樞密使

呂公弼請、以河北義勇、每指揮揀少壯藝精者

百人爲上等、手背添刺上等字、

など見ゆ。王安石の行つた保甲法も一種の義勇兵制度であるが、これには入墨は行はなかつた。彼の保

甲法を辯護せる辭の中に（^{宋史卷百九十二兵志、長編卷二百二十三群書考索後集卷四十六兵制}）

門、

義勇以良民爲之、當以禮義獎養、今皆倒置、

涅其手背、人不樂一也、教閱靡費、人不樂二也、又使運糧、人不樂三也、

とあつて、今迄の郷兵には手に入墨せしを、保甲制度實施によつてその弊を改めたことを得意に述べてゐる。その他郷兵に刺墨せし例は長編、長編紀事本末、群書考索などのみにても多數の例あり。郷兵を悉く刺黥せしかと謂ふに然らず、例へば長編^{卷二百三}治平元年十月の司馬光の上奏に、

昔康定慶曆之間、陝西之民爲郷弓手、始者明出

敕防云、使之守護鄉里、必不刺充正軍、屯

戍邊境、勝未收、而朝廷盡刺充保捷指揮、令于

邊州屯戍、

と見ゆ。こは英宗の治平元年十一月、陝西諸州にて、主戸について三丁に一人、六丁に二人、九丁に三人を選び、刺墨して義勇兵となしたに對し、司馬光が反對して上言したる一節であつて、治平の刺手より以前には康定慶曆頃に陝西の民を籍して刺墨せしことあ

るを指摘してゐる。群書考索後集卷四十一兵制門民兵の條を調ぶるに、康定慶曆の前には、范仲淹が寶元中に西夏の李元昊を撃ちたる際、延州地方の郷兵に手に刺墨せし例のみである。郷兵即ち民兵は太祖の時からあるが、名實共に義勇兵で郷土を守り、事變あれば從軍し、終れば農に歸る状態であつた。しかるに仁宗の寶元、康定、慶曆頃には、宋の西北に在る西夏に李元昊が出で、大夏皇帝を自稱し、宋の西北邊即ち陝西地方に連年侵入し來り、宋では韓琦、范仲淹をして之れが討伐にあたさせたが、仲々成績上らず、宋にては國家の歲出入と云ふものは、この頃から急に膨脹し來り、兵力の不足を告げた結果、ここに遼及び西夏に接せる國境の諸地方即ち河北河東陝西方面の民兵の戰鬪力を強化し、以つてこれ等缺陷を補ふ策に出た。當時の正規軍には黥面する制度あり。民兵の力を正規軍同等に高めるには、それと同様の制度に従はざる可からずとて、ここに黥面に非ずして

宋代軍隊の入墨について

手背に入墨する方法をとつた。宋代民兵に入墨し始めたのは、この頃即ち仁宗の寶元、康定、慶曆頃にあると思はる。しかも禁軍廂軍の如く顔にせずして手背になせるは民兵の特色であつて、國家の傭兵である禁軍廂軍と、義務兵である郷兵即ち民兵との差違によつて、民兵には軽く手背に入墨したのであらう。故に民兵より正規軍になす場合には改めて顔に入墨した。長編卷一百に、三十五に、

慶曆二年、三月乙卯、中書樞密院奏、乞簡河東弓

手有武勇者、不刺面爲義勇指揮、陝西弓手、

刺面爲保捷指揮、從之、(詔、保捷は陝西にありたる禁軍の名)

とか、長編卷二、百三にある司馬光の言に(龍川別志卷下に
も見ゆ)、

慶曆間、陝西郷民、初刺手背、後皆刺面充正軍、

とかあるが如し。南宋になりても民兵は矢張り手に刺墨したものの如く、建炎以來繫年要錄卷百六、十二に、

紹興二十一年五月辛亥、右朝奉大夫知大安軍張輔世、代還言、四川惟利州一路、創置義士、悉於保丁内選充、而文其手、

と見ゆ。要するに民兵の特色は手背に入墨するにあり。

次は蕃兵である。蕃兵即ち土兵は民兵の一種であつて、只人種が異なるのみ。民兵に入刺する以上は、土兵にも亦これ有るは當然である。宋史^{卷百九}兵志に見ゆる熙寧七年三月王韶の言に、

今蕃兵各願於左耳前刺蕃兵字、從之、
と。又同書同卷元豐三年の條に、

凡募弓箭手、蕃捉生強人山河戶、(中略)皆涅於手背、

とか、同書同卷崇寧五年の條に、

蕃民既刺手背爲兵、安可更出租賦、

とか、同書^{卷百九}兵志、熙寧七年の所に、矢張り王韶の言として、

其蕃弓箭手、並刺蕃兵字於左耳、以防漢兵之盜殺而效首者、

と見ゆるのや、同卷に、熙寧八年五月李承之に詔して蕃兵法を參定せしめたことを載せ、十一月には詔じて陝西の蕃兵を採用するにあたりては、悉く手背に涅刺するを言つてゐる。蕃兵に刺墨せしは右に列舉せる宋史の諸例で充分明かにし得るから、他の諸書の例は省略する。

以上私は宋代の軍隊なる禁軍、廂軍、鄉兵、蕃兵の各々には、原則として刺墨する制度あるを例を擧げて述べて來た。勿論時には刺墨せぬ軍隊もあつた。しかしこれは特別なものである。その刺墨する場所も大體禁軍、廂軍は顔に、鄉兵、蕃兵は手背になす區別あり。又先に擧げし例の如く、蕃兵には左耳に刺したる場合もあり、或は又宋の莊季祐の撰せる雞肋編^卷下に見ゆる張俊の軍に於いては、卒の少壯長大なる者を選んで、臂より足に至るまで全部入墨し、こ

れを花腿と云つたとあるが、これ等は皆特別なものである。元來軍隊に刺撃することは、原則として逃亡を防がんがため、その起原の所に於いて述べて置いた。支那に於いては今日でも招兵^召とか、拉夫とか、拉卒とか云つて、市井田野にある青壯年を暴力を以つて捕へ、強制的に無理無體に軍隊に編入する。

宋代に於いても亦かゝる強制招募が行はれた。宋史^{卷百九十三}兵志召募の制の所に、徽宗の宣和頃の拉夫の有様を述べ、

宣和四年三月、臣僚言、竊聞道路洶相怖云、諸軍捉人、刺涅以補闕額、率數人驅一壯夫、且曳且毆、百姓叫呼、或鬻指求免、日者金明池人大和會、忽遮門大索、但長身少年索之而去、云充軍、(中略)捉人於途、實虧國體、流聞四方、傳播遠邇、殊爲未便、伏望亟行禁止、以弭疑畏、

と。無幸の人人を捕へ直ちに刺涅して以つて軍の缺

宋代軍隊の入墨について

員を補ふ。中には自から指をかみきり、不具者となつて免れんことを計るものすらあり。この外宋史^{卷百三十九}兵志には、

咸淳季年、邊報日聞、召募尤急、官降錢甚優厚、強刺平民、非無法禁、所司莫能體上意、執民爲兵、或甘言誑誘、或詐名賈舟、候負販者群至、輒載之去、或購航船、人全船疾趨所隸、或令軍婦冶容誘于路、盡涅刺之、由是野無耕人、途無商旅、往往聚丁壯數十、而后敢入市、民有被執而赴水火者、有自斷指臂以求免者、有與軍人抗而殺傷者、無賴乘機假名爲擾、

と。こは宋末度宗時代の有様で、甘言で誘ふたり、だまして船に乗せてつれ去つたり、客を乗せて航行中の船ぐるみ買ひとつたり、女に化粧させてエロじかけで誘つたりして兵を集めたから、市井田野には青壯年者の人影なく、市に行く必要あれば團隊を作つ

て行く。かくて捕へられた者の中には水火に赴いて死する者もあり、自から指臂を斷つて免れんことを計る者あり、或は軍人と抗争して殺傷される有様であつた。又建炎以來繫年要錄^{卷七}紹興四年六月の條には、

先是、行在諸軍、多强刺^二平民爲^レ兵、人有^レ斬^二手指以自免者^一、

と。これ亦自から手指を斬つて强制徵集を免れんとしたのである。その外繫年要錄には、^{卷百五}十五に、

紹興十六年、四月丙寅、御史中丞何若言、諸路多執^二平民强刺^一、人情不安、非^二太平肅靜之意^一、望嚴行^二禁戢^一、從^レ之、

とか、同書^{卷百六}十一に、

紹興二十年、七月丙子、上諭^二大臣曰^一、近進士鄧楮上^レ疏、論^二諸軍强刺^一平民爲^レ兵非^レ便、

とか、同書^{卷百七}十九には、

紹興二十八年、春正月己巳、殿中侍御史王珪言、

殿前馬步軍三衛、强刺^二平民爲^レ軍、詔禁止、先是殿前司闕額數千人、詔^二三衛分^一月招補、而所遣軍士、利^二其例物^一、往往驅掠市人、以充^二數^一、民以^二樵採魚鰕爲^レ業者、皆不敢入^二行在^一、至^レ有招^二刺輦官者^一、自行在^一至^二衢婺數州^一道路之間、商旅不行、遠近大擾、

と。これは市人を招刺して不足なるにより、輦官までも驅掠するに至つたことを述べてゐる。かかることをなすは再三禁止され、この時も改めて禁止したるにも不拘、その效無く、同書^{卷百八}十四の紹興三十年正月丁酉に宰執が奏して曰く、

三衛强刺^二平民充^レ軍、乞約束、上曰、已先戒^二三司不得^一强刺^二云云^一、

とあるが如く、又同書^{卷百八}十七に、

紹興三十年、十二月戊申、左朝奉郎知嚴州樊光遠奏、三衛誘^二略近郡平民爲^レ軍、乞自^レ令軍下不許^一收刺、遇有^二闕額^一、均下^二諸州招填^一、庶幾軍

無_二闕額_一民獲_中安堵_上、

と見ゆる如く、支那にては、兵卒は好人不當_レ兵と言ふ諺のやうに人間の中で最も劣等とされてゐる以上、普通の人は兵士となるを好まず、ここに強制徴集して闕額を補ふ必要に迫られるのである。強制徴集されて不平不満のまゝに軍務に従事する故、何かの機會あれば逃走せんとす。ここにこれを食止めんとするの一段として生れたのが黥面涅手の制である。しかしそれでも逃走はやまない。宋史_{卷九十三}兵志に、

崇寧四年十月、尙書省言、今所在逃軍聚集、至_二以千數、小則驚動鄉邑、大則公爲劫盜、…近日熙河一路、逃者幾四萬、…逃亡軍人、所在皆有、開禧元年、參知政事蔣芾言、在_レ內諸軍、每月逃亡不下_二四百人_一、

紹定四年、臣僚言、蓋州郡吝_二養兵之費_一、所_レ招無_二二三_一、逃亡已六七、

宋代軍隊の入墨について

など見ゆ。或は宋の張守の撰せる毘陵集_{卷一}、論禁軍逃亡_二割子_一には、

臣訪問、行在禁軍、近日頗有_二逃亡_一、とか、建炎以來朝野雜記甲集_{卷十}に、

在_レ內諸軍、每月逃亡事故、常不下_二四百人_一、

などあつて、逃走は黥面涅手しても止まない。よつて、嚴刑を以つて彼等に臨んでゐる。宋史_{卷百九十三}兵

志によると、逃亡の法は國初以來實施され、國初は禁軍逃亡すること滿一日なれば斬に處せられた。仁宗の時、滿三日と改められ、更に神宗の熙寧五年には滿七日に改められた。以後時に寛嚴あり、流配の法なども併せ用ひたが逃亡は止まない。逃亡することによつて凍死し、餓死しても、歸隊することを好まないのであるから、たとへ百の嚴刑を行つても、たとへ全身に入墨しても、逃亡はやまないであらう。長編_{卷百五十}に、

仁宗嘉祐六年、十一月、詔、如_レ聞諸處逃軍、藏_二匿

民間、或在_二山谷_一、寒餓轉死者甚多、其令_二開封府及轉運司_一、出_レ榜曉示、限_二兩月_一、首_二身_一、除_二其罪_一、とある如く、死に至るも逃亡してゐる。

以上宋代軍隊の鯨面涅手の有様を述べて來た。この風は面白いことには宋の次の元時代になつても、宋軍の名残りとして、一部手記軍、手號軍、涅手軍なる名稱にて残つてゐる。續文獻通考^{卷百二}兵制の所に、宋の遺軍として、生券軍、熟券軍、請糧軍、通事軍、福建畚軍、江南鹽徒軍、土兵など、共に手記、手號、涅手諸軍の名が見え、又卷百二十八にもこれ等は宋の遺軍で元につたはりたる郡國の兵、郷兵と記してゐる。事實先きに述べたる如く、宋代郷兵に涅手する制度あり、手記、手號も涅手のことを言ふのであり、元へは禁軍、廂軍の鯨面の制度はつたはず、涅手兵のみが傳つたやうである。しかし宋末元初頃は宋の將軍兵士にして元に降伏する者多く、元ではこれ等を皆元の兵籍に入れたるを以つて、宋末元初頃には

元の軍隊中には鯨面の兵卒もあつた筈である。かの我が元寇の役の繪巻物なる竹崎季長の蒙古襲來繪詞中に見ゆる元軍中に、顔面の非常に黒いものあり、これ等は鯨面軍を描けるものではなからうか。しかし元代には正規軍を鯨する制なし。これを以つて宋代正規軍の鯨面の制は傳らずして只元は各地の宋の郷兵の存在を許し、これを召集したるによつて、宋代涅手の郷兵も残り、涅手軍、手記軍、手號軍なる名によばれ、元の最後の天子順帝時代にも手號軍のあることが、元史^{卷四}順帝本紀に見ゆることからしても、元一代を通じて存在したのである。かく名稱は存するが、恐らく元になりてからは、その新軍に對しては手背に刺墨しなかつたであらう。元史^{卷十}世祖本紀、及び^{卷九}兵志によるに、

宋有_二手記軍_一、死則以_二兄弟若子_一繼、詔依_二漢軍_一
(例)籍_レ之、毋_レ文_二其手_一、(本紀)

と。元になりて編成されたる當初は涅手なりしによ

り、涅手、手記、手號などの名を付したのであらうが、後には名を残し實は失つてゐたのであらう。而もこれ等は代々世襲し、涅手、手記、手號諸軍士の子は又涅手、手記、手號軍士となつたのであらう。

昭和十一年十二月三日稿了

- (1) 章俊卿の群書考索後集卷四十一、兵制門の州兵の條には、古者、凡國之役、皆調於民、宋有天下、悉役一廂軍、凡役作營繕、民無與焉、

とあつて、一般人民は國家の役作營繕に關係せずとなつてゐるが、通鑑長編紀事本末卷六十六には、

自五代以後、凡國之役、皆調於民、故民以勞繁、宋有天下、悉役一廂軍、凡役非三工徒營繕、民無與焉、故天下民力完固、承平百年、

となつて群書考索とは反對になつてゐるが、群書考索の方が正しい。

- (2) 宋史卷百九十二に王安石曰、唐以前、未レ有黥兵、然亦可ニ以戰守、

- (3) 建炎以來繫年要錄卷十五にも八字軍のことが見えてゐるが、ここでは單に八字軍とのみあつて、文字は記してない。

- (4) 建炎以來繫年要錄卷百五十一に、

詔、今後臣僚有面刺大字、或燒炙之人、許ニ入見、時諸

宋代軍隊の入墨について

將多起於群盜、上既命更迭入朝、統制官李用者、面刺雙旗、閤門以爲疑、故審於上、而有是命、とあり。

- (5) 宋代に至るまでの刑法の變遷は、樂全集卷二十四、請減刺配刑名の條、宋史刑法志、長編卷四乾德元年三月の條によりて説明した。

- (6) 舊唐書卷五十刑法志には、太宗の時に斷趾法を除き、改めて加役流となし、流三千里、居作二年となしたとあつて、居作即ち役は二年となつてゐる。これは三年の誤りであらう。

- (7) 丘澹の大學衍義補卷百四に、

唐之流刑、既定三里數、又於此外、有所謂加役流者、於衆流之上、宋因唐制、每流各加以杖、而配役、則是五刑之中、兼用徒流杖三者、矣、本朝（明）流罪、惟有杖而不配役、比宋爲輕矣、

とあり。制度通卷十三にも引用してゐる。

- (8) 長編紀事本末、卷六十六、議減兵雜類の條による。

- (9) 刺面が刺手より重くて人人が嫌つたことは、長編卷百三十四に、

慶曆元年、十月己丑、御史臺推直官祕書丞李宗易言、奉詔之河東、募強壯充軍、其強壯避刺面多逃逸、乞止刺其手、從、と見えてゐる。

宋代軍隊の入墨について

- (10) 刺賊せぬもの二三例を擧げんに、長編卷百三十四に、

仁宗慶曆元年、冬十月癸未、鄜延都監神世衡請、募青澗城土丁、不_レ刺_レ面、別名爲二軍、從_レ之、

建炎以來朝野雜記甲集卷十八に、

諸軍效用者、諸軍皆有_レ之、不_レ涅_レ其面、虜賜厚於正軍、建炎間、其數猶少、紹興七八年後、則漸衆矣、

- (11) 難肋編卷下に、

車駕渡_レ江、韓劉諸軍、皆征戍在外、獨張俊一軍、常從_二行在、擇_二卒之少壯長大者、自_レ臂而下文刺至_レ足、謂_二之花腿_一、京師舊日、浮浪輩以_レ此爲_レ誇、今既效_レ之、又不_レ使_二之逃_二於他軍、用爲_レ驗也、然既苦楚、又有_二費用_一、人皆怨_レ之、加_レ之營_二第宅房廊_一、作_二酒肆_一、名_二太平樓_一、般運花石、皆役_二軍兵_一、衆卒謠曰、張家寨裏沒_二來由_一、使_二他花腿擡_二石頭_一、二聖猶自救不_レ得、行在蓋起_二太平樓_一、とあり。

- (12) 文藝春秋卷十四の第二號所載の海軍中佐三上射鹿氏の支那狩獵綺譚なる實話の中に、現今行はれてゐる拉卒の有様が述べられてゐる。

- (13) 宋史卷三百八十四蔣卞傳にも見ゆ。

- (14) 箭内互博士遺著蒙古史研究所收「元代の官制と兵制」頁八〇八にも簡單なる元代の手記、手號、涅手軍の説明あり。

- (15) 元の日本遠征軍中に、確かに黥面の兵士が居たことは、元史

卷十三、世祖本紀に、敕_二囚徒、黥_二其面_一、及招宋時服_二私鹽_一軍習_二海道者_一、爲_二水工_一、以征_二日本_一、とあることによりても判る。

- (16) 長編卷二百十四、熙寧三年八月申書の言による。

- (17) 例物は利物の誤ならん。南宋の李彌遜撰鈔溪集卷一、東南募兵畫一狀の所に利物とか招軍利物の語見ゆ。